



Title	人を轢き、声を轢く
Author(s)	辻, 明典
Citation	臨床哲学のメチエ. 2014, 21, p. 8-14
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/40500
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

人を樂き、声を樂く

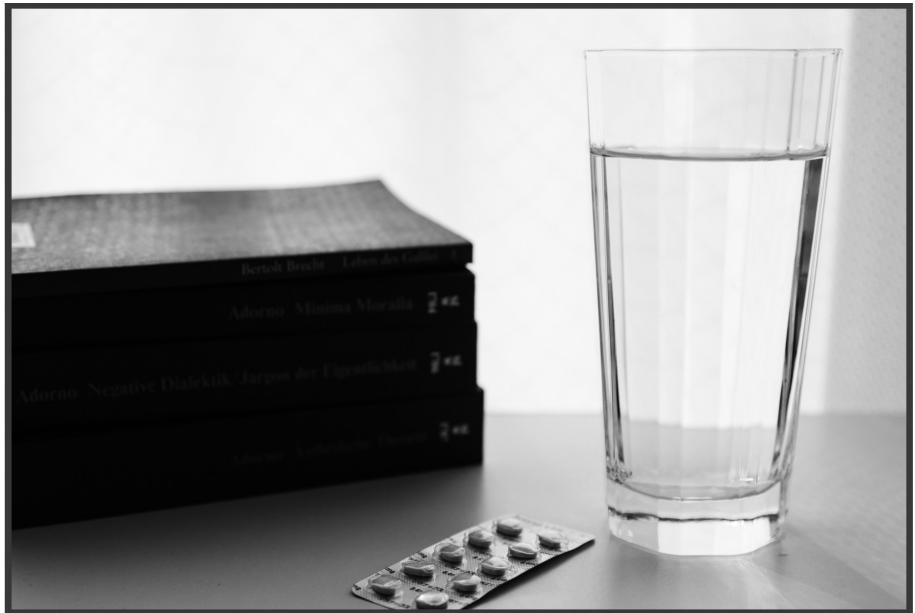
辻明典

僕は家路を急いでいた。車のラジオからは、天気予報と一緒に、各地の放射線量の情報が流れている。毎日のように聴いているけれども、その値はいつも変わらない。この道を通るとき、いつも一抹の寂しさに襲われる。僕は寂しさから逃げるよう、今日もラジオのボリュームを上げた。

そろそろ、交差点に差し掛かる。信号が、青から黄、そして赤へと変わる。僕は少しづつスピードを落とし、車を停めた。停めた車の中で、僕はまたラジオのボリュームを上げた。岸壁に打ち付けられる波の音が、微かに聴こえる。今日は、海が荒れているようだ。聴きたくない。波音を焼き消すために、またラジオのボリュームを上げた。どんな番組でもかまわなかつた。

信号が青に変わる。僕は、念のため、両目で左右を確認した。もやがかかっている。安心などできない。気をつけねばならない。それは、僕に課されてしまったのだ。意識ではない意識だ。右足でアクセルを踏み込むと、僕の心はいなくなつてしまつた。心ここにあらず、いや、そうとも言いきれない。人はいない、家など、この辺りにはないのだから。そんなのは、わかりきつたことだ。でも、僕に向けられた声が、声を発しないままに、僕を縛つている。僕に向けられた声。それは、誰も呼びかけることはない。細く、蜘蛛の糸のような纖維が、僕の意識をひっそりと、しかし確実に縛つている。

声の聞き方を忘れてしまつた。気づかぬままに、忘れてしまつたのだ。内なる声は、いつの間にか聴こえなくなつてしまつた。声の届き方も、わからない。白状すれば、心の底では、声を聴きたくないと



も思つていた。聴きたくなかったのだ。

しかし、声の持ち主は、突然に、ゆつくりとした足取りで、僕の車の前に現れた。目を閉じる暇はなかつた。両腕に力が入つたせいで、一瞬遅れたと思つたが、右足でブレーキを踏み込む。僕の身体は、強い勢いで前方に引っ張られた。そのとき、僕は、その声の主と目が合つた。年老いた目をしていた。にらむのではなく、高ぶる感情を押さえきれぬような目で、一瞬の間を突くかのように、僕の両目をじつと覗き込んでいた。充血し、真つ赤な血管が浮き上がつた両目を、かつと見開きながら、僕の内側に迫り込んでくる。一瞬だけ、その人の口元が緩んだ。すると、まるで穴にでも吸い込まれるように、その人は車体の下に巻き込まれていつた。両目を反転させ、真つ白な目を一瞬だけ見せながら。口は半開きだった。その頭は強く地面に打ち付けられ、ぐわんという重々しい音が響く。その音は、運転席でもはつきりと聴こえた。

生まれて初めて、人を轢いた。「人を轢いてしまつた」という確信があつた。ぐにやりとした感触が、ブレーキを踏んだ右足から、僕の身体に伝わつてくる。悲鳴は聞こえなかつた。声の聴き方を、忘れてしまつたのだから。でも、ラジオから流れる音は、はつきりと聴こえている。

震える左手でサイドブレーキをかけた。乾いた木材が折れたような鈍い音が、耳に残つて離れようとしない。息を整えることなどできず、僕は鍵を左に半分だけまわした。二つつなぎの嫌悪が、僕の心臓をえぐつてくる。僕の左胸は、僕が犯した罪を突きつけるように、今にも破裂しそうな音をならしながら、内側から僕の身体をえぐりだす。こんなときでも、やはり疾患が気になる。狂つたような鼓動が、辛うじて保たれた均衡を崩すかのように、僕の内側に祟食つてゐる。心臓が、ピンと張つた粒子の糸によつて編まれそうで、無性に胸を搔きむしりたくなる。人の安寧を奪つておきながら、真つ



先に我が家を案じるとは、僕は残酷な心の持ち主であるようだ。

急いで車外に出た。空は雲に覆われ、月明かりさえ朧げにしか見えない。街灯もない。狂気の影が忍び寄るなかで、いかに正気を保てばいいのか。容赦ない高波に打ち付けられた岩場の悲鳴が、すぐ近くから聞こえてくる。砂塵をのせた潮風が、容赦なく僕を痛めつけてくる。乾いた口は閉じることを忘れ、じやりじやりした砂粒が、歯と歯の間に入り込んでくる。僕は腰を屈め、車の下を、砂を噛んだままに、覗き込んだ。恐怖の感情すら、繊維の束に縛られてしまつたためなのか、僕にはわからなくなつてしまつた。

人を躊躇いてしまつた。しかし、声の主は何処にもいない。懷中電灯をともしながら、僕は車の下を覗いた。血痕もなければ、遺体もない。そして、声も聽こえない。安心はした。でも、怖かつた。

僕は深々と息を吐き出した。そして、立ち上がるうとした。ここを離れなければいけない。そう思った。思つた。思つてしまつたのだ。その瞬間であつた。僕は腰のベルトをぐつと捕まれ、わけもわからず、急に後ろに引っ張られた。僕はとつさに頸を引いたのだが、少しだけ丸まつた背中が、まだ舗装されていない道路に打ち付けられて、思わずうつとなつた。しばらく、呼吸がうまくできなくて、その上、じやりじやりした口のななかが乾き始めて、苦しくてたまらない。肋骨の内側が、ぐつと締め付けられたみたいで、息ができない。胃がねじ切れそうになるのをこらえられなかつた。燃え上がるような液体が、喉元を突き刺しながらわき上がり、口元から溢れ出す。僕は息を吸うために寝返りを打つた。そのとき、地面がぬれているのがわかつた。土の表面の砂利が、液体と混ざりあい、どろどろと、僕の掌にまとわりついてくる。さびた鉄のようなにおいが、僕の近くを取り巻いている。真つ赤に染まつた異臭に支配されていた。息を整えるまで、何分かかつただろうか。砂塵が口の中に入つてこないよう、鼻からゆつくりと息を吸いつづけた。



悪寒がする。身体が震えた。声は聴こえない、ただ、ラジオの音だけははっきりと聴こえる。僕は人を轢いてしまったようだが、轢かれたのは僕だったのか。罪の意識は和らいだが、僕はますます僕を縛つてしまつたのだ。それだけは、はつきりとわかつていた。

つじ あきのり（文）

南相馬市立原町第二中学校講師、てつがくカフェ@せんだいスタッフ。福島県南相馬市内で、哲学カフェを開催中。

おぎの りょういち（写真）

臨床哲学／美学／文化研究、演劇制作者、上智大学文学部哲学科卒。大阪大学大学院文学研究科臨床哲学研究室博士前期課程在学中。考えること、あらわすことの様々なる方／かたちに関心を寄せています。

今年は、これまでの写真作品についても整理・発表を試みたいです。